

2018 年度 G T セミナー  
第 49 回 保育環境セミナー  
2018.10.15 ～ 10.17 前編

第87号 2018年10月29日発行

# ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に答えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていけるよう  
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

## 第49回保育環境セミナー

2018年10月15日～17日に第49回保育環境セミナーが  
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から 130 名程の先生方が集まり、各園の実践発表や園見学、意見交換会を 3 日間に渡り行いました。

1 日目 2018年10月15日 (月)

10:00～ 園見学  
13:30～ 見学園紹介  
15:00～ G T活動報告  
15:00～ 休憩  
15:30～ 講演  
17:15～ 意見交換会

**2 日目 2018年10月16日 (火)**

9:00～ 実践園報告  
9:30～ 見守る保育の5つのポイント  
11:45～ ミマモリングソフト紹介  
12:00～ 昼食  
13:00～ ドイツ報告  
14:00～ Q&A  
15:30 終了

**3 日目 2018年10月17日 (水)**

10:00～ 園見学



---

## 第 49 回保育環境セミナー 基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

---

### —はじめに—

皆さんこんにちは。今日見学された方どう思われたか。また最終日の見学の人は話を聞いてみてください。まず、毎回どんな話をしようかと考えているが、見学を受ける中で、見学者からの質問で私たちも勉強になります。こういうことに悩まれるのだということがある。先日、見学に来た方に何が課題か聞いたら、3,4,5 歳が遊び込めない。その時にどう環境を作って、ゾーンを作ったらいいかと見に来た。その時に私は最近、きついことを言ってしまうが、その先生に「子どもたちにコーナーを作っても遊び込めないのは、あなた達のせいではなくて、0.1 の先生のせいです」と言ったことがある。例えば、私が提案している保育がどうゾーンを作って、3,4,5 歳が自発的に遊んでいるように思えるがそれは、私が提案している話ではないです。強調するが、大きな出来事で指針の改定があるが、まず最初に起きた改定は昔になるが、私たちの保育が「指導」することから「援助」することになった。保育園は「指導」から「援助」になった割には定着がしない。どうしても「指導」するべきという考え方がある。熊本のある養成校で、学生を集めて県全体で就職ガイダンスを行ったそう。大学の先生が学生に「皆さんの仕事は、白いキャンパスに絵を描いていく仕事です」と保育の仕事の説明をしたそう。白紙の紙に絵を描くというのは、20 年前に否定されています。

### —白紙論—

今は、赤ちゃんは白紙では生まれません。赤ちゃんは有能な学習者であることがわかった。最近の新しい考え方が、赤ちゃんは当然何もできません、知っている大人からやってもらわないといけない。大人は成熟している。赤ちゃんはまだできないから、未成熟だと思われていたから、大人が指導しないとダメだと思われていたが、赤ちゃんは何もできない。何もしていけないとしたら、赤ちゃんは誰かにやってもらえるように、しかけないとやってもらえない。という事で、現在の研究で、大人にやってもらうために、やらせるようにしかけていることが分かっている。例えば、大人が赤ちゃんに微笑みかけているというが、赤ちゃんの方から先に微笑みかけるようにしているということが分かっている。赤ちゃんは、大人を使いこなすわけなので、大人以上の能力があることが分かっている。自分ができるようになるにしたがって、その能力が消えていくと言われている。未成熟な生き物ではなくて、大人を使いこなす生き物で、最近発見したことが、何でもできる大人が何でもできるとしたら、これからはもっとできるのは人工知能。それを私たちは使いこなさないと多分いけない。もし、赤ちゃんよりも大人の方が成熟しているとしたら、私たちより成熟しているのはロボットになってしまう。赤ちゃんは大人を使いこなすことを学ばないといけないくらい、それくらい有能で、白紙ではない。赤ちゃん観があるとしたら、例えば、過去の保育を提案している人が再評価されている。最近、倉橋惣三さんが再評価され、研究者の中にも研究をしている人がいるが、私も立派で子ども観もいい。子どもは能動的で、子ども主体で考えるという事を参考にする。過去のブログで 10 年くらい前に、倉橋惣三さんのことを書いたことがある。ブログの中で、倉橋惣三さんに共感するけれど、途中から違和感を感じている。それは、子どもは能動的で主体的にあるにもかかわらず、誘導保育、系統的保育と言って、大人が指導して誘導しないとダメだと言っている。私は、子どもは能動的で自らやるのに、何で誘導しないとダメなのか。その時は、時代性だろうと言っている。例えば、「見守る保育」を始めた園が、民営化を受ける前は、ラキューというおもちゃを、時間を決めて使わせていた。この「見守る保育」にしてから、いつでも使っていていいよとしたら、ラキューが部屋中に

散らばった。倉橋さんは子どもが能動的であり、主体的でもあるにかかわらず自由だったら、ひっちゃか、めっちゃかになるから誘導しないといけない理論を作ったのだらうと思った。もう1つ、例えばモンテッソーリは私は尊敬するし、子どもの考え方も素晴らしい。自発的で主体的であると思うが、本を読むと前半は賛同するが、後半になると違和感を感じる。それは、お仕事と称して先生が教具を提示して、その通りさせていくのを見たときに「えっ」と思った。それは時代性だらうと思っていたがそうではなくて、その時代は赤ちゃんは白紙論なんです。白紙で生まれていることが前提で、大人が誘導しないといけないという前提なんです。ですから、そう思って読むと、指針も未だにそれが残っている部分が多い。それから園舎の作りもそれが残っています。

## —最近の赤ちゃん観—

ドイツに毎年行っているが、オープン保育が流行っているが、オープン保育はどこへ行っても、どの先生にいても、園内自由というもののだが、当然日本だとどこにいるか分からないとか、好きな事しかやらないのではと心配をして、ドイツでも最初保育者が、子どもが何をしでかすか分からないと反対しそう。そこでやったことは1年半かけて、最近の子ども観を研究したそう。最近の研究で子どもはこういうものだ勉強したら、全員が賛成に回ったそう。私の園に見学へ来た方も、「2階と3階の行き来が自由だと、先生たちは把握しているのですか？」と聞かれます。まず基本的に、把握して何をしたいか。誰が3階にいて、把握して何をするか。お迎えのときは分かるが、うちの先生は「3階は、3階の先生が見ています」としか言いようがないが、いろいろと調べるとアメリカで、子どもを把握していないと隠れたところで、麻薬やセックスをしている。保護者は、子どものことを把握していなさいと言われた。それ以来、子どもを把握しないといけないとなり、いかにも保育者の仕事のように言われたが、実際に園内で子どもたちが麻薬やセックスするわけがない。ちゃんとわかっていたら危険なことはしない。把握することは、目の前でコントロールするところに置くことになる。一つは、子どもが好きなところへ行けなくなると探索活動が減ってくる。探索活動の研究は進んでいて、昔は1歳になると探索活動をする一つの発達遊びとして捉えられていたが、今は遊びではないと言われ、遊びのための下見をしている。遊びの前の活動と言われ、探索活動が豊かにできている子が、遊びの豊さが広がると言われている。もう1つ、探索活動の距離が長いほど、危険回避能力が増すとされている。赤ちゃんが物の深さを知るようになります。だから階段に行かないということがある。赤ちゃんは持っているが、それがはっきり認知できるのは、移動距離が大きいほど移動する。探索するのは危険回避や将来のための遊びの豊さのために大切で、把握しないといけないということで、先生がだんだん否定し始めていると言われている。目の届く所にいなさいと言ってしまいがち。それが『ホモサピエンス全史』という本がベストセラーになっているが、今把握するためにアメリカでは何をしているかというと、薬を使い始めている。ADHDでも使っているが、日本にも次第に入ってきて、このまま進むと日本でもじっとさせるために、薬を使うようになると言われている。非常に危険な方法です。より危険回避能力がなくなるので、また危険なことを防ぐようにするようになる。というようなことがあり、「3.4.5歳が遊び込めないのは、0.1の教育の影響」と言ってもいいくらい赤ちゃんの頃が影響する。

## —乳児保育の重要性—

結論で言った時に、3歳までずっと家の中で、お母さんの目の届くところで育てられてしまうと、ひっかき、噛みつき怪我も多く、そうすると余計監視するようになる。子どもはこうしないといけないとなってしまう。実は赤ちゃんからそういう経験をしていると、自分で行かなくなる。最近の研究によると、0.1歳が重要であると言われている。それが私が提案したいこと。3.4.5歳でコーナーを作ってやるという事ではない。繰り返しになるが、「保育の質」のことで新聞記事をお見せする。去年、日経新聞に出た記事で、非常にタイトルがある意味でショッキングだった。

日経新聞なので経済新聞で、『保育所 幼児教育の場に』というのを見てびっくりした。何故かというたとえば、『保育所』の下に何を書くかということ、「女性の社会進出」「育児と仕事の両立支援」とか、「お母さんのためにある施設」と経済新聞なので書くはずだが、『幼児教育の場』と書いて、上は「幼稚園」と書くはず。ですから、このタイトルは2つ繋がり方がおかしい。何で『保育所』と書いてあるかということ、保育園の方がいいのではなくて、乳児保育が大切だからです。保育所は、私たちが言っている保育園ではなくて、3歳児未満児が世界的に幼児教育として見直されていますよというタイトルなんです。そして、未満児の保育の質が重要なので、その次に書かれているのが、世界各国が質への注目、関わり方で、保育所の中身1歳児保育の質が将来影響しているという研究が、続々と出されている。そして、乳児教育の結果、幼児がある。幼保一体化カリキュラム導入が進むという事で、見学者の方に説明したが、世界的に0歳から就学前までを一体化して幼児教育として、きちんと位置付けるべきだという事で、ドイツの例だが、ドイツは二元化だった今は教育化に一本化した。同じ年齢なのに省庁が違うのはおかしいという事でそうになった。フィンランドは共産国で、全員働いて保育所が充実して福祉国家です。フィンランドの考え方は「保育園は、両親の不在時に子どもの世話をする役割であるのと同時に、幼児の心身の発達を促す教育を与える機関として考えられています。社会福祉部門の管轄であった保育園は数年前に教育文化省の管轄へと移ったことから、教育施設としての保育園の役割が重視されていることがわかります。」日本で、保育園は福祉であると強調する人が多いが、世界では教育機関である、教育機関で管轄しています。各国は、乳児から教育へ移り始めています。これは、最近色々な国で施策される中で、文化の中で制度が出来ているが、根本から見直さないといけない。という事で、人類から見直そうという事が起きています。乳児から教育だということがわかってきています。日本でも指針が新しくなり、「乳児保育のねらいと内容」と「1歳以上3歳未満のねらいと内容」が付け加えられた。

## —赤ちゃんの姿—

赤ちゃんの動画を観てください、ハイハイをしている赤ちゃん。探索のようにも見え、保育室から出て行きます。この赤ちゃんは何でハイハイをしているかということ、自分が使ったエプロンをしまいに行くところです。それに先生が気づいています。この映像を見て皆さんが同じように保育をしていたらあると思うが、多くの人たちはびっくりします。私の園の赤ちゃんがすごいのではなくて、こういう姿になるには3つ条件があります。1つ目は、赤ちゃんは出来ないと思って先にやってしまうとこういう姿はありません。2つ目、1歳を見ているからです、自分で仕舞いに行くのを見ているからで、0歳だけでずっと保育をしていたらこういう姿は見られません。役所は0歳だけ隔離しなさいというが、家庭の中で兄弟が同じ年齢はいません。ドイツは0~6まで同じクラスにいるが、一体化になった時私が質問した。「0歳は発達も情緒の安定も他と違うから、0だけ隔離することを考えなかったのか？」と聞いたら、ドイツの人は「日本では0歳は0だけ別なんですか？」と聞かれたので、「別です」と言ったら感心された。感心されてその話を進めてみたら、「全ての家には、赤ちゃんが生まれたら他の兄弟とは別で過ごさせるんですね、凄いですね」と言われたから、「家では一緒です」と言ったら、「何で園では別なのですか？」と言われた。何で別々かと言ったら、上の子が来たら危ないからというが、「家でも、下の子が寝てたら上の子はどうするんですか？配慮して静かに歩くんじゃないですか？」と言われた。一緒にいることで真似をしたり、世話をしたり発達に影響を当てるのに園は、「1年間0歳は0だけ別なのですか？」と言われた。人類は決して同じ年齢同士だけでいるのは、学校が始まって認知的なものを伝達するようになってから年齢別が始まった。それまでは年齢で分けていない。学校をモデルにして、幼稚園が年長のプレスクールが始まって、4歳3歳としてなったから学年が残ってしまった。フレーベルが、キンダーがデーンを始めたときから異年齢です。年齢別というイメージはない。学校のプレスクールからはじまってい

るから、そういう作りが多いが、日本では難しいのが2つ目の理由です。3つ目は、私の園で見てもらおうと分かったと思うが、職員が黄色とオレンジの番号をつけていたのは、今日だけ見学者が分かりやすいためにつけました。私の園では、番号で1番2番3番の役割の人がいるので、普段は阿吽で動いているが、見学者の人に何番が何をしているかがわかるようにつけていた。1番は先頭に立っています。今日、1番が焦っていたのは、ある子が泣いている時に、本当は2、3番が見ないといけないのだが、1番がその子を見ると全体が進まない。2番がフォローして3番はこうとあるので、これが可能なのは這っていった先に別の先生がいる。これをいわゆる担当性と言って、一人が3人を見ていたら、一人の子がどこかへ行ってしまったら止めざるを得ない。室内に均等に先生がいる。行った先は、行った先の先生が見るようになっているので、子どもは探索活動も出来る。

## —集団の考え方—

もう1つ見学者の方に言われたのが、何で担当性にするかもわかる。子どもはただでさえ、ひっかき噛みつきが多いのに、こんなにいっぱい的人数だと大変なので、少人数で観た方が見張れるが、そう言う先生がうちの園を見てびっくりしていたのが、うちはひっかき噛みつきはあっても週1回か月1回。集団が大きい方があるようだが、少人数で見張られている方がする。普通の発想とは違う。集中も少ない人数が少ない方がすると思うが、お集りのときも1番の先生のことを集中してみている。それからもう1つ。散歩に行くときも、これまでの集団・一斉だと個人的に見えないと言って、少人数にすることがあるが、うちの園ではちょっと遅くなる子は4番の先生が見るので、きちんと一人の先生が見れる。うちの場合は個々の発達の早さによって見れる。集団統括が出来ないと思っているが、集団の方が集団規模が小さくなるので、より見れるというのは大間違い。そうではなくて、先生が役割を持って1番が役割を持ってしたほうが、今日給食が始まる時、4番や5番の先生が気にしながらも食べ始める。集団だと個々が見えない。集団だとストレスで噛みつくのではないかというが、それは昔の集団。誘導保育や系統的保育の集団は、よくなかったと思う。その時は個々で観た方がいいという理論が出るのは当然。しかし、個々で見るというのも、うちの園みたいに20、30人いるような集団は、3:1や4:1で見える方が、かえって子どもの情緒が不安定になるという研究がされている。それよりも、集団の楽しさや子ども同士の関わりを重視した方が子どもは落ち着くという研究がされ、愛着の遠藤先生もそういう提案をしている。集団的感性という言い方をするが、その中で萎縮しないようにとか、うちではチーム保育という形でフォローしていることがあり、01歳の時にしておくと、3.4.5歳になって落ち着

## —自立の考え方—

それからもう一つ自立の所であるが、やれないと先生に子どもが言いに来る。これも集団の中での自立で私の考え方が変わったことがある。先ほどの0歳がモデルにしたのは1歳児クラスです。袋にしまうので大変なので、広げてと見学者であろうが誰にでも頼む。これは私の園では、集団の中で人見知りをしません。先生は頼まれやすいように、その場所にいます。この時に皆さんはどう考えるか分からないが、先生の所に頼みに来たらすぐに広げてあげます。広げてあげないで、自分で仕舞う方法を教えるとします。「こうやるよ」と教えて、先生はいつもやってあげてしまっています。どっちがいい先生かを考えたときに昔だったら、手順を教える方がいい先生だと思っていました。それは自立が早いです。すぐやってしまうと当然依存してしまう。子どもはすぐ頼むのではないか。手順を教えた方がいいと思っていたが、現場を見るにしたがって、すぐやってあげた方がいい先生と思うようになりました。先生は頼まれたらすぐにやっています。こうやっていた子たちが5、6月頃だが、半年後一人でやれる子が出てきます。入れたがっている子がいたら、先生は近くにいますが、自分でやれるようになると先生に頼みません。頼まれてやってしまっ

す。自分にやれることは嬉しいので、自分でやりたがります。やってあげると言っても自分でやります。楽だから頼むのは大人の発想で、子どもの発想にはありません。子どもは発達する喜びを持っているので、やれるようになる自分と自分でやるようになる。自分でやれるようになった頃に、自分でやれない子はどうするかを見たとき最初びっくりした。自分でやろうとするがやれないので、仕舞いたがっているの近くを先生が通る。でも頼まない。もう一人の先生方も頼まれやすいようにしているが、無視してしまう。何でだろうと見てみると、友達に頼んでいます。これは仲がいいというわけではないが、やってあげます。この子は何をモデルにしているかという、すぐにやってくれる先生をモデルにしています。手順を教えている先生を観たら、こういう事はしない。自分でやるのは早いけど、すぐやってあげる。この男の子も自分で出来ないが、先生の所にはいかないで途方に暮れている、そうするとさっきやってもらった子がやっています。自分でするために手順を教えた方がいいという事を、私も頭の中で思っていたが、現場を見るにしたがって変わった。すぐやった方がいい先生。子どもたちが頼みに来ると、先生は何も言わないで広げがままやってしまう。こうやっていた子たちが6か月後、1人で出来る子たちが出てくる。先生は入れたがっている子がいると、先生はわざと姿を現す。しかし、自分で出来るようになった子は頼まない。いくらやってあげても自分でやります。赤い女の子は、自分でやれないがしまいたがっているの、先生が前を通過して頼むだろうと思ったが、この子は無視していってしまう、何でだろうと思うと不思議なことが起こります。友達に頼みにいきます。特に仲のいい子ではない。この子がやってくれるが、何もモデルにしているかという、すぐにやってしまう先生。この子がその特徴かと思っていたら違う。お礼も特に言わないけれど、すぐに持って来た男の子も、先生ではなくて友だちに頼もうとする。さっきやってくれた子がやってくれる。自分にやれるようになる、やれない子は友達に頼むようになり、自立は何のためにするかという、指針の中の人間関係の中に、「お互いに支え合って生きていくために必要」と書かれている。社会に出て、お互いを助け合っていないといけない。無人島で生き抜くための自立ではありません。そのために自分が何をしてあげられるのか、そういう関わりを出来るようにする。異年齢はこの関わりが非常に多いが、驚愕的な動画を撮った。ある実験をしてみた。本を読み聞かせている時に、先生がトイレ行ってくると立ち上がってみると、おもちゃのウンチおっこちた。それをどうするか。1歳児はびっくりして、どうしよう、触るに触れないでないでいて困っている時に、その時は先生が、こういう時はビニール手袋をして、ビニール袋に入れることを教えると、1歳の子どもがやります。それを2.3.4歳とやっていくとどの年齢もびっくりする。しまい方を知っている1歳児が上の子に教えていた。教えるのは上が下にではなくて、知っている子が知らない子に教える。年長はそれが玩具と分かるが、それをわかって、片づけない年長に向かって1歳は年長に教え、年長は分かっているのに教わったようにしている。エプロンをかけあったのを見たと思うが、掛けさせてあげている。個の関わりが非常に重要。そうすると、友達に何でも頼むかと言ったらそうではない。何かしていることを見つけて動画を撮っていた。この時期に友達に出来ないことも分かっている、誰ができるかを考えてきている。赤ちゃんは人を使いこなし、まず優先は自分自身、友達、先生。その中でも先生を選ぶ。不安になったら決まった先生に行く、それが愛着存在。愛着存在も赤ちゃんからすると、時と場合によって違う。この先生の所へいつもいるが、その先生いなければこの先生と、複数の中から選んでいく。それは優先順位だけでなく、怖さによっても人を選ぶ。優しい先生と怖い先生がいたら、いつも優しい先生の所にいるが、ある時怖い思いをしたら怖い先生の所へ行って、誰が自分を助けてくれるかを知っている。それは赤ちゃんが決める。大人は、色々な人に出会えるようにすることが大事。着替えるとか、袋に入れる時は近くの先生に使いこなし、自分で出来るようになったら人にやってあげる。そうするためには、大人はどうするか。

## —「見守る」とは—

『見守る保育』と言うと、どこから見守ればいいのかと聞かれることがある。それは簡単なことで、赤ちゃんは自分でやれるようになったら頼まない。大人に頼むのは大人にできることで、大人は頼まれたらやればいい。自分でやろうとしたら見ている。これが応答性とされている質の高い保育のこと。赤ちゃんはきっと頼むだろう。言ってもいないのに、先回りしてやってしまうと依存してしまう。先回ってやってあげたりすると、3.4.5歳になると、大人が言わないとやらなくなってしまう。若い先生が意識してか分からないが、感心したことがある。1歳の先生が、リーダーの日にある子が泣いていた。その子に向かって、「やって欲しいなら、ちゃんと言いなさい」と言った。泣いている子が、もっと大きな声で泣いた。そしたら「ちゃんと自分で言えたね」と言って、やってあげていた。それが言葉が出るようになったら、言葉で言うようになる。スウェーデンに行った時、スウェーデンでは、まず目で何をしたいかを察する。スウェーデンではそれだけでは、やってあげない。その後に言葉にすると述べていた。私たちは察することだけでなく、自分で表現することを順にさせてあげないと、3.4.5になったら誰かが気づいてくれるだろうと思って、言わないと例えばお漏らしをしてしまう。自分で出来るようになる、コーナー・ゾーンで遊びこむには、小さいうちから自分で言うようにする。私の園ではそういう事も含めて、乳児の頃のおやつ配りの動画があります。乳児のおやつである時、ジャム付のパンがあった。すごく残菜が多かったので、調理にジャムを塗ってあるのと、無いのと用意して、先生が聞くようになった。2つ出して自分が食べたいほうを選ぶ。勝手に取るのではなく、人に伝える。そうすると極端に残食が減った。どちらかを選ばせていると、付けているのがなくなり、若い先生はどちらかを選ばせないといけないのと思って、「こっちにジャムがついている？ そっちが付いているのにする？」と聞いていて、どちらもジャムが付いているのにも思いつつも、子どもはこっちを選んでいたら食べていた。おやつがビスケットの時、1枚か2枚かをどちらか選べさせることとした。一つは数が分かるか、もう一つは、もう一枚食べられるかお腹と相談をする。小さい子に選べさせると選べない。どちらがいいか決められない。数が分かることと、お腹の空き具合を表明する。選択はどちらかだけでない、さつまいもで小さいのと大きいのか。ある子が決められないのかなと思ったら、お茶だけでいいと選択した。私たちは、栄養を子どものお腹の中に入れることではない。自分で表明する力をつける。たったおやつの時間だけでもあり、3.4.5歳の成長に繋がってくる。赤ちゃんからこういう能力を持っている。

## —脳の拡大—

それが表されたグラフ。いつごろ脳が出来上がってくるかというもので、YouTubeに出ていた。特に注目されるのが、8.9ヶ月がピークなのが、エモーショナルコントロール。3歳以上ではほとんど伸びないと言われている。指針の改定の時に出されたが元の表と違う。日本で示されたのはエモーショナルコントロールしか見せなかったが、ヒアリング、ビジョン、レスポンス、これらは3歳以上では脳が拡大していかない。政府がやろうとしている意図と、おかしいことになるので見せていない。これらがここで大きくなるためには、いろいろな人の話を聞く、顔を見る、応答的にすることで拡大していく。これらが非常に大事。これらを見るとほとんどの脳は3歳未満に起きる。その準備が十分にできていないと、認知的なものが入れられない。かつては地域で代わる代わる抱っこされ、脳を大きくし、その後、認知的なものを入れるので3歳以上で幼稚園に行って、認知的なものを入れるということだったが、少子社会になり、人口が減ったら、脳を拡大させる環境が家庭では不可能になる。園が重要なので、この時期に脳を拡大させることを協力と言っている。現在で言えば3歳未満児。0から2歳児クラス、ただ重要なのではなくて、質のいい保育をするときに限る。

## —保育の質について—

私たちは質のいい保育を考えないといけないという事で、質の研究を日本でもしている。しかし、中間報告を見たが、質について議論されていない。世界の研修の質とは何も被っていない。世界の質の中にあるのは、OECDが出している質の高さ、保育者の言葉かけのプロセス面。保育者と子ども、子ども同士関わりのことを言っている。関わりが重要でプロセスの質と言われています。乳児に関して、これがあることが将来に影響している。3歳なるまでの間012歳に質の高い保育を受けると、そうでない時に比べて3歳以上で変わってくる研究です。特に言葉かけや3歳未満の時に受けた質問、応答性など。質問は何かをしなさいではなくて、どうする？と聞く事で、食べる時もどっちにするような質問が脳を拡大していきます。応答的も子どもがやってと言ったら、やってあげる。言う前にやらない。アメリカの研究だが4歳半テストをします。テストの結果に数字の理解、言語能力が標準テストの結果がよかった。ここまでは保護者講演で言うが、保護者講演では言わないことは、保育者と子どもとの良好な関係が（3歳時点）、小学校3年生の学業成績に影響がある。保護者が知ったら大変。2歳の時の担任のせいと言われる。私の園では、良好な関係というので2歳の時期に保護者がクレームが多いので、2歳の先生を信頼することが学業に影響すると言った。変な親は子どもを放っておくが、まだましと言われている。ひどい親でも、いい先生の影響が大きい。変な親の子ほど、私たちしか救えない。最近の研究では、親なんて大して影響がないという研究がされている。親がそんなに影響を与えるなら、同じ親の元で育ったら同じようになるはずだが、同じ親の子でも全然違う。聾啞者の両親でも、話すようになるという子どもとの関係から学んでいる。親よりも子ども集団が影響すると言われている。3歳まで育休を伸ばそうとするが、聾啞者の中で3歳まで育てたら、絶対に喋れるようにならない。影響が全てではない。その大きいのは子ども同士。複数の大人からの影響を受ける。イギリスの研究では、どういう関わりが必要かを研究した。関わり方の特徴の一つは、先生の関わりが温かく応答的であること。質問されたら答えを教えるのではなく、深め続ける関わり、一緒に楽しむ先生が質が高い。深めることが2つの特徴が脳を拡大するときの有効な関わりです。子ども主導の遊びや活動が多い、子どもが中心で先生が繋ぎ発展させる遊びが多い。脳の拡大を見ると未満児の話で、未満児でも子ども主導の活動が多かったり、先生は発展させることが質が高いと研究されている。日本では無償化を検討されているが、無償化と同時に大事なものは質のいい保育に変えないといけない。どんなものが質がいいかを研究されているが、指針の改定会議の時に、私がヒアリングで、関わりが温かくて応答的であることを入れて欲しいと言った。私のヒアリングの影響ではないと思うが、「1歳以上3歳未満の保育に関わるねらい及び内容」の所に、「温かく見守るとともに、愛情豊に、応答的に関わる必要がある。イ人間関係。立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気づき等につなげていけるように援助すること。」と書かれた。感情をコントロールするは、エモショナルコントロールが未満児の頃に脳が大きくなるからです。これが今の世界の中の研究です。質が高いことで一番提案したいことは、乳児からの教育・関わり。特に子ども同士の関わりを提案したい。『見守る』の観点。温かく応答的であることが見守るという事です。ほっとくことではないし、こちらに行った時にやってあげる。言ってくる子たちを作ること、意見を言えることがポイントです。部屋を見て伽藍堂で、ロッカーが周りにあったのが昔から提案しているが、スタンダードな保育。実は平成元年のとき幼稚園教育要領で、「幼児教育の特性を踏まえて、環境を通して行うものであること」という事が基本とされた。先生の役割は環境を構成すること、子どもと共に想像することと30年前に、私はこの頃コーナーというものを考えた。そのために信頼関係を創造するように努めると外部に出された。学校教育法の中にも書かれている。その後の教育の基礎を培うものとして、この保育はとても重要で、「保育」という言葉は、もともと保つと育む。家庭やお母さんを保とうとした。お母さんを保つと書いて保母さん。「保育」という言葉をもう一度使わないといけないと思っているのは、白紙でつけるのではなくて、生まれて

持っているものを保ちながら育むことが保育だと思っています。子ども自ら持っているものを保ちながらそれを育んでいくことが保育です。育んでいくことに適当な環境を与えて心身の発達を助長することが育むデス。保育園は家庭を保つのではなくて、子どもが持っているものを保ち育む。幼稚園は申し訳ないが、幼稚園というのは、幼く稚拙な子どもに指導しなければいけない発想から来ている。幼稚園は白紙論から来ている。幼稚園という名前を付けたのか分からないが白紙論の人が付けたのだと思う。今回の指針の改定にも継承されています。保育所の役割の中に書かれている。この中の養護は面倒を見ることだけではない。保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭と緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。私たちは環境を通して行うという事なので、逆に文科省から勉強になります。文科省が管轄しているの学校教育ですので、学校教育というのは、学校建築はどうあるべきかを研究するところがある。大学を建築を出たときに、学校建築を選び研究する中で、幼稚園部というのがある。指針の改定で建築の改定がある。環境を通した保育という事で、平成元年に無藤先生のフェイスブックの中で、「しまい込む保育」から「選べる保育」というテーマで、遊具や素材を旧態依然の保育がまだあるらしいと書いてあった。子どもが取り出すという発想がない。もったいない、危ない、壊すなどの心配の声があるが昔の子ども観。幼稚園教育要領とか、改訂の前に、環境を通した保育とは何かを説明する。30年前から言っているのに現代に来ない。未だに昔からやってきた先生は、否定するのかと居直る。10月1日に衣替えを思い浮かべるが、今は寒かったら着ればいいという感じだが、昔はそういう気候だった。台風も昔はこの時期に来なかったが、今は気候が変わっている。昔はこうだったと言っても防げない。今の天候に合わせて、対策を練るのと同じように、今に合わせて保育を変えていかないといけない。

## —世界での『見守る保育』の動き—

来月にシンガポールに行くが、昨年の2月に講演をした。シンガポールは学力が高いと言われ、私が講演した時に、お母さんとの会話を見せた。息子：「お母さん、学校に友達がいらないんだけど？」母：「何で？先生に話してあげるね」。これっていい親だと思いますか？次の写真は、徴兵に行く若者がスマホをもって前を歩いている。お母さんは後ろからバックを背負っている。こういう子たちを変えないといけない。もう1つ、中国で公演した時にAI時代になった時に、子どもたちにどんな力をつけたらいいかという講演を頼まれた。学力が高いのに、『見守る保育』を実践する園が140園くらいになっているが、学力が世界一なのに、話を聞くと、5年後に受験を受けるなら今のままでいい。15年後位に受験するときに、今の保育を変えないといけない。先を見て保育を見直していた。受験も、あなたはどうか考えますか？となるだろう。中国でもシンガポールでも、びっくりした。シンガポールで世界一になるためのカリキュラムを作っていた。英語と中国語とマレー語を一体保育にしようとか、バリバリやっていたが、このやり方では時代遅れだと気付いてきたけれど、世界一時代遅れの日本は、この考え方を歓迎するだろうと、この方法を輸出するだろうと言っていた。日本は親がそれを望み、専門家がそれを飲んでしまう。日本は15年後大変になると思いますね。中国へ行った時にもこういう保育を勉強しているので、日本でも大学改革を行っている。もうすぐセンター試験が無くなり、今までマークシートで何を知っているかを印をつけていたので、それを改定して、どう思うかに変わると言ったら、馬鹿にされた。「未だにそんな試験をしていたのか、中国はとっくにしていない」と言われた。世界の大学ランキングでアジアでは中国が1位でした、日本はずっと下。日本は教育が最も遅れている国のように思っている。私は、日本は優秀な国だと思っている。だから馬鹿にされず、日本から輸出しようと提案しているが、日本の方が頑固。外国の方がすぐに取り入れてくれるが、何で日本が取り入れないか分からない。私たちは将来

